

第5回ラテンアメリカ天文学会に出席して

磯 部 秀 三*

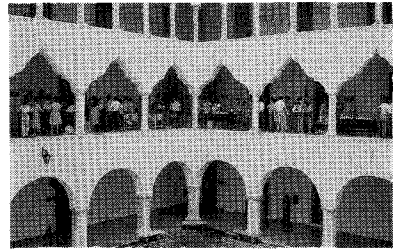
1986年10月6日から10日までメキシコで開かれた第5回ラテンアメリカ天文学会に出席する機会があったので、その様子を紹介しておきたいと思う。国際天文学連合は3年に一回ずつ総会を開いているが、その間にそれぞれの地域の総会をも開いている。日本が含まれているアジア・太平洋地域の第4回総会は1987年10月に北京で開かれることになっているし、ヨーロッパ地域総会は3年に2回ずつ開かれている。メキシコから南のラテンアメリカ地域の国々の集まる総会も3年に1度ずつ開かれてきた。

第5回ラテンアメリカ天文学会がメキシコで開かれることになり、組織委員長になったメキシコ天文学研究所所長のロドリゲス氏が近年の日本の天文学の発展を考慮して、日本の天文学について話すことを日本天文学会理事長の早川先生の所へ要請してきた。その手紙には何人も天文学者の端の方に私の名前もあがっていて、他の方々は忙しい時期であったので私にこの大役がまわってきてしまった。行く事が最終的に決まったのは6月であったので出発まで準備が大変で“なんでこんな役を引き受けてしまったのか”と思ったりしたが、結果的には出席してみても非常に有意義で楽しいものであった。

会議はメキシコのユカタン半島の州都にあるメリダ大学の講堂で行われた。メリダ大学には特に天文学関係の学科があるわけではないが、マヤ文明の発祥地で古代には天体観測が行われていた地であるという事で選ばれたようである。会議の様子は地元の新聞やテレビに取り上げられ、アジアからの唯一の出席者である私にも各社のインタビューがあり、私の発表に関する質問などの後にマヤの天文学についてどう思うかと質問されて返答に困ってしまったりした。

ラテンアメリカ各国から全部で150人位の天文学者が集まった。経済状態が十分でない国が多く、旅費を得ることがむづかしいので出席者が少いと言っていた。しかし、表に示したように全体では700人近くの天文学者(大学院生は含まれていない)がいて、人口100万人あたりの天文学者の数は日本の4.8人/100万人に比べても少くはない。

会議は午前8時30分に始まり途中1時間の休けい兼パネル論文の展示を含んで午後2時まで続けられる。4時まで昼食で午後7時半まで会議がある。ラテンアメリカの人々の昼食と夕食の時間にあわせてあるので、私やアメリカ人はこっそり早目に抜け出して食事に行ったり



メリダ大学の回廊に展示された論文を見ながら談笑する参加者

した。

会議での話はすべてスペイン語であったのにはまいてしまった。ラテンアメリカ各国ではスペイン語を使っているのだから当然であろうが、国際会議は英語で行われるものと信じていた私には少々ショックであった。ポルトガル語のブラジルの人にも似ているのでスペイン語でもまったく気にしてしない。アメリカなどからの参加者もほとんどすべてスペイン語の理解できる人が多く、まったく駄目なのは私とジオフレー・バービッジの二人の招待講演者だけであった。おかげでバービッジ氏と1982年以来久しぶりに何時間も二人で話す機会ができ、何が幸いするか判らないとも思った。

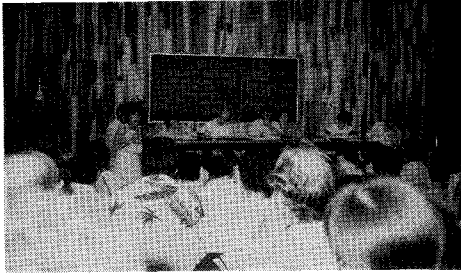
せっかくはるばる来たのであるから、スペイン語が判らなくても時々聞える英語に似た発音の単語とオーバーヘッドプロジェクターで投影されている内容を見ながら理解しようとし、質問もしてみたが、北緯17度の10月の暑さの中クーラーのない部屋での会議では1時間もしないうちに疲れてしまった。

講演は私の判る観測分野では新しいものが多くあった。これらの研究はアメリカやヨーロッパの研究者と共同したものが多いように思った。私の専門分野のHII領域ではチリーのガレイによるコンパクト・ソースの観測はHII領域内部にある小さなグローブユールの様子を明らかにしていて印象的であった。

私の発表は出発前に何人もの人に教えてもらった日本のX線、赤外線、電波観測の最新のものと、日本の7.5m計画の概要を最初にして、その後私達のグループで行っているハニカム鏡の製作、経緯儀式望遠鏡の製作、光子計測カメラの開発、スペックルカメラの開発、画像処理プログラムの開発の話をした。話の後、英語がクリアーで内容も良かったと何人もの人にほめられて、なんとか役目を努められてホッとした感じであった。

会議には女性天文学者が多く出席していた。40% 近

* 東京天文台 Shuzo Isobe



総会で、激論を交わす参加者

くになり、しかも、招待講演者や総会の各国代表者にも半数近くの女性がいた。フランスも女性天文学者が多い国であるが、それに次ぐ感じであった。

最終日に総会があった。この時もラテンアメリカの人々の粘り強さに感心させられた。毎日 30 度近い講堂での講演会をずっと出席しているのに感心させられていたが、この総会の時は午前 11 時から午後 3 時まで延々と議論が続けられたのである。議論の 1 つは次回の総会をどこで開くかという事であった。私の感覚ではどこで開くかはほぼ決まっていた、総会では承認するだけというものであるが、彼等は優劣をその場で次々と議論するのはしてない感じであった。最後に投票になってチリ 1 票、カナリー島 30 票、ブラジル 38 票、棄権 10 票でブラジルになった。しかし、それからが興味ある結末で、再び議論が始まり、1989 年にブラジル、1990 年にカナリー島で行うことになってしまった。

もう 1 つ議論は国際天文学連合から独立したラテンアメリカ天文学会を設立するかどうかというものであった。これも 2 時間近くの激論の末お流れになったようである。

各国入り乱れての議論は隣のアメリカ人の訳してくれる言葉を通じても激しかったが、エキスカッションや晩餐会ではみんなすっかり打ち解けてしまうようである。マヤの遺跡を見に行った帰りにプールがあると男も女もみんな水着になって水球を始めたりで大騒ぎである。それが若い人ばかりでなく、50 歳以上の人達も参加してである。晩餐会ではジルバやタンゴで踊り出し（女性が半分近くいるので数のつりあいは良い）おまけに総会の議長をしたホセ・フランコ達のエレキバンドの演奏まであった。

私がドイツにいた 1972 年にウィーンでドイツ天文学会が開かれ、その時の宮殿の大広間でのパーティーでもみんなウイナーワルツを楽しそうに踊っていたのを思い出した。ドイツの時と同じように私も踊りに参加し、最後には日本の歌まで歌ってしまった。拍手と “I love Isobe” という紙切れを何枚ももらえ、会議ばかりでなく、ここでも役目がはたせたと考えた。

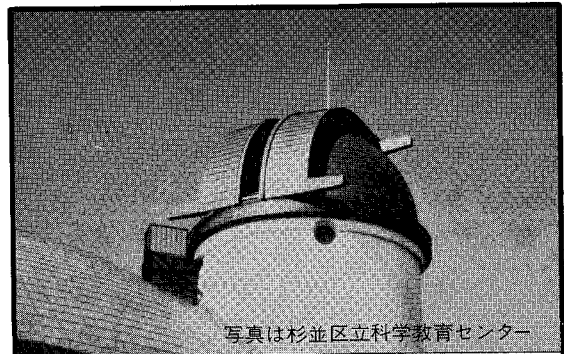
判らないスペイン語で悩まされはしたが、一週間がま

たたくうちにすぎた感じであった。そして、ブラジルの日系三世のマサエ・サトさんが日本語で堀先生や木下先生はどうしているという言葉を知りたり、多くの人が何人も日本の天文学者の名前を挙げていろいろと聞いてくれた。ラテンアメリカの天文学者の日本の天文学への期待の大きさのためであろうか。割と簡単な気持ちで出かけた私ではあったが、終ってみてその役目の大切さが認識でき、なんとかこなせたことにホッとしている。

最後に、このような有意義な機会を早川理事長始め理事会の方々を与えて下さった事を感謝します。

ラテンアメリカ各国の天文学者の数

国名	天文学者数	研究所数	人口百万人あたりの天文学者数
アルゼンチン	165	9	6.6
ボリビア	1	1	0.1
ブラジル	151	12	1.4
チリ	48	6	4.8
コロンビア	5	2	0.2
スペイン	121	18	2.7
メキシコ	131	14	1.6
パラグアイ	1	1	0.3
ペルー	1	1	0.1
ポルトガル	17	8	1.1
プエルトリコ	10	2	6.7
ウルグアイ	5	3	1.7
ベネゼラ	15	3	1.0



写真は杉並区立科学教育センター

★営業  品目★
天体望遠鏡と双眼鏡
ドームの設計と施工

▶主なドーム納入先◀

東京大学宇宙航空研究所 / 東京大学教養学部 / 東京大学芸術学部 / 埼玉大学 / 福島大学 / 川崎市青少年科学館 / 杉並区立科学教育センター / 駿台学園高校 (北軽井沢) / 船橋市立高校 / 高知学園 / 土佐市公民館 / 刈谷市中央児童館等の他、日本全国に100余基の実績。

ASTRO 光学工業株式会社

東京都豊島区池袋本町2-38-15 ☎03(985)1321